

振り返れば薄氷

太田 齋

1986年に赴任して32年経った今年(2018)3月に定年退職となり、恒例の退任に当っての一文を私もこうして書くことになった。これまで中国語学の世界だけで生きてきたような人間だから、これまでを振り返っても神戸外大の思い出以外には中国語学関係者との交流しか思いつかない。という訳でこの一文は神戸外大関係者に向かって書いたものなのか、中国語学関係者に向けて書いたものなのか、判然としない内容のものになってしまったが、他に書きようがないので、ご容赦願いたい。まあ私の退任の記を読んでみようなどという気になる方は限られるであろうから、それほど気にすることもないか。

赴任の1986年は神戸外大が六甲から学園都市に移転したその年である。私は六甲学舎時代に学生生活を送り、その時、訳の分からん授業をしておられたのが長田夏樹先生だった。何という巡りあわせか、その後任として今度は自分が学生に子守唄を歌い続けることになった。自分自身は面白いなあと思いつつ喋っているのだが、ふと見ると受講生は舟を漕いでいる。逆の立場に立ってみて、初めて長田先生の心中を察することが出来るようになったと思う。極端な話、専門とする人間が非常に少ない分野だと、自分は日本で(ひょっとしたら世界でも)五本の指に入ると比較的容易に豪語するようになれる。しかしその反面、世界を共有できない哀しみに絶えず直面することになるのだ。元々興味のない学生に面白がれというのがどだい無理な話だが、凡人の性で達観するには少々時間がかかった。

私は特に周囲に抜きん出た幼少期を過ごした訳ではないので、子供のころについて特に語るに足るほどのことはない。大学入学から説き起こすことにしよう。大学入学時こそ比較的優秀と目されたが(でも一浪の身)、外大の学生生活は、正直なところ理屈を捏ね回す大学生活を想像していた自分には違和感があった。というのは屁理屈である。要するに一貫して成績は良くなかった。だからノーベル賞受賞の小柴昌俊先生が学部時代は劣等生だったなどというようなコメントを目にするととても嬉しくなってしまう。誤解の無いように断っておくと、断じて私も小柴先生同様にダメ学生からついには優れた研究者になった、などとほざい

ているのではない！私の場合とはとにかく運に恵まれてここまで来ただけで、次元も状況も全く違うが、しぶとく特定の分野にしがみついて拘り続けていると、何か見えてくるものがある（ことがある）という一点については共通するところがあるかなと思っている。

学部二年のときだったか、言語学特に構造主義の音韻論が面白いと感じて、それを中国語に適応するとどうなるのか、そんなことに拘り出したのが研究の道に進む第一歩だったかも知れない。山末一夫先生の授業だった。先生が大阪外国語大学に転出された後は、その後任の近藤達夫先生に音声学と言語学を教わったが、情けないことにその熱意に十分に応えるような努力を全くすることなく、言語学への理解は今なお構造主義で止まったままである。文法研究は語感が無ければできないものだが、音韻論は語感がなくてもできる。ロジカルに突き詰めて行くことができるなら、中国語のレベルが低くても研究は可能だ！何ともはや乱暴な理屈である。それで同じ「音韻」と名のつく中国語「音韻学」を齧り始めることになるのだが、構造主義音韻論と余りに様相が違うので大いに面食らった。「音韻学」は漢字音の歴史を追及するもので、そのためには韻書や韻図を理解していなければならないのだが、当時はそれを理解できるようになるための日本語の入門書が皆無といってよいような状況であった。中国語で書かれた概説書を読むしか手がないのだが、購入も容易ではなく、図書館の蔵書を利用するしかなく、おまけに中国語の読解力レベルも悲劇的に低かったから、モノになるはずがない。三年生のときだったか、京都の朋友書店でお目にかかったのが縁で、人文研の助手だった松尾良樹さんに誘われて均社の会合に出させてもらったこともあったし、また当時大阪外大院生だった佐々木猛さんに誘われて董同龢の『漢語音韻学』の読書会に出たこともあったが、すぐにぼしょってしまった。結局、現代方言ならなんとかかなるか、橋本萬太郎先生の論文を利用して薄っぺらいカスのような卒論を書いた。指導教官は太田辰夫先生で、先生には全く相談することもなく、事前を書くという意思表明さえせずに突然提出したので、大変驚いておられた。当時の太田ゼミは老舎の作品を読んで、訳稿を作成提出し、それをチェックしてもらおうというような形式で、それとは全く無関係なことで書いた訳である。なお長田先生もゼミでは白話小説の会読を行っていたはずである。氷上正氏はゼミ生だったので、彼に聞けば具体的な作品名も分かるはずである。長田先生はゼミ生を隔年募集の形式にしておられ、私がゼミ選択する年が集は無かった。ここで誤解の無いよう釈明しておく、だから仕方なく太田先生のゼミを選んだという訳ではない！実はついぞ授業で教えることはなかったが、太田先生は音韻学についても造詣は深かったのである。

なお出来の悪い私が大学院進学を選択したのは全くの否定的選択の結果である。

営業もダメ、マスコミもダメ、公務員もダメとあれこれ考えて見ると適性を見出せるような行先が無い。という訳で大学院に行くことが出来れば、将来非常勤講師で何とか食いつなぐことができるだろうというような実に安易な気持ちだった。正にモラトリアム人間である。非常勤の口がどんどん減って、研究者厳冬の時代の今だと怖くて到底できないような安直な判断である。

太田先生に進学先について相談したところ、東京都立大学を薦められた。そこでも試験の成績は良くなかったはずだが、何とか拾ってもらえた。面接で悪印象を与えたことは他で書いたので、ここでは繰り返さない。指導教官は慶谷壽信先生である。都立大学は当時、目黒にあって、地の利から高名な先生が非常勤講師として驚くほど大勢教えに来ておられた。私の在籍期間に限っても、敬称略、順不同で思いつくまま列挙すると、橋本萬太郎、平山久雄、戸川芳郎、志村良治、北村甫、風間喜代三、国語学の方でもグロータース、村山七郎といった錚々たる方々の講義があった。慶谷先生もまだお若くて、院生を集めて梵漢対音の論文の読書会を開いたりしておられたし、院生同士でも読書会、研究発表会を組織したり、同人誌を編集したりと、甚だ活発だった。私はというところの恵まれすぎともいえるような環境の中で、大いに知的刺激を受けていたはずなのだが、授業ではよくうたた寝、輪読会や発表会では逃げ回るといふ、自覚に欠けるダメ学生であった。なお院生は学部から上がって来た生え抜きは殆どおらず、ほとんど外様ばかりだったので、大変居心地がよかった。その一方で、そんな周囲の院生たちは皆よくできる人ばかりで、学問的知識、センスはいたずらに年数を重ねれば比例級数的に伸びるというものではないことを痛いほど思い知らされた。その筆頭が同期ながら私より一歳若い古屋昭弘氏で、指導教官よりも多くの事を彼から学んだように思う。自分自身こんな体たらくだったので、教師となつてからは授業で学生がうたた寝しても怒る気にはなれないし、劣等生の心情、できない哀しみもよく理解できるつもりでいる。

修論で何をテーマに書こうか途方に暮れていた時にも、慶谷先生からは満洲語・漢語対照の韻書を扱ったらどうかと言われたものの、当時先行研究がほとんど無く、どう扱って良いか皆目見当がつかなかったので、その助言を無視して、先行研究がある程度あるものへと逃避して、『西儒耳目資』というローマ字表音の明代宣教師文献を対象に選んだ。先行研究にない新しい見解として何が出せるかがき、音韻の記述そのものからズレて状況証拠からそこに反映する基礎方言について従来の説と異なる説をひねり出したが、状況証拠からの推論に過ぎないので、日本中国学会全国大会で口頭発表はしたものの、論文として公表する気になれず、その後この論文は長くお蔵入りしていた。切り口を変えて論文として公開発表することになるのは20年後のことである。なお当時はパソコン、ワープロ

が普及する前で、全てが手書きであった。原稿用紙にペンで清書が普通で、段落を入れ替えたりする場合には原稿用紙を切ってつなぎ直したりしていた。だから私の場合、推敲の結果、蛇腹みたいな原稿となるのが普通だったが、修論をそんな様相で提出する訳にもいかない。締切前夜には鈴木陽一、落合守和、古屋昭弘、氷上正の四氏が清書の助っ人に駆け付けてくれて、徹夜でつきあってくれ、私が書く端から分担で清書してくれた。お蔭で締切にかろうじて間に合っただけだ。この四氏には感謝しても感謝しきれない。それを今頃言うか！と突っ込まれそうだが、心底感謝しているのです！出来上がりは私を含めると、五人の筆跡が入り混じる、何とも筆跡に統一感の見られない友情の証と相成ったが、どうしたことか注がズレてしまった（もちろん私のせいである）。それを口頭試問の際に慶谷先生に指摘されたのは今は昔の無様なエピソードである。なお古屋氏は私の同期だが、自分の修論は間に合わないからと、提出を一年延期して、自分の論文そっちのけで、わざわざ私の清書に尽力してくれた。氏は本当に人格者である。ちなみにそうして満を持して完成された氏の論文があつた。王仁昫切韻の又切が原本玉篇に由来するという趣旨の画期的な雄編である。

修士の期間はとにかく二年で何とか書き上げて、博士課程に行けたらそこで新しいことに手を染めようと思っていた。その一つが西番館訳語の漢字音に関するものだが、先行研究が西田龍雄先生のものしか無く、見ようによっては西田先生の揚げ足取りのような論文であった。後々神戸外大に奉職してから、西田門下の方から太田は虎の尾を踏んだと脅かされたが、西田先生にお目にかかった際にも批判的なことは言われることなく、むしろ温かく接して頂いたように思う。これもまた私が鈍いから皮肉の言辞を察知できなかったということなのか…。

博士課程の二年目だったか、日中の政府間留学生相互交換制度が発足した。1979年のことである。それまで中国留学が可能だったのは所謂友好人士の子弟だけで、それも親が日中友好運動を一定年数（具体的な年数失念。20年くらいだったか）以上行っていないなければならないという条件がついていた。だから日本人が大陸に生きる中国人の生の発音を実際に耳にするということは極めて困難な時代であった。当時の日本の各大学では（大陸出身の）中国人教師を見つけるのが大変困難だったはずである。そういえば当時の神戸外大の中国人教師の方も中国を離れてからずいぶん長く日本で暮らしておられる方であった。閑話休題。

私はその翌年の1980年に第二期派遣生として留学が認められた。そのとき手にした留学先大学リストにはせいぜい一ダース程度の数の大学しか載っていなかった。学術活動がストップしていた文革期間がようやく終了して間もなくのことで、まだ情報が殆ど無かったから、どの大学にはどんなコースがあり、どんな教員がいるのかということもまるで分かっていなかった。新天地(?)を求め、文学以

外に語学の課程も挙げられている大学の中から、前年度にリストに無かった山東大学を選んだ。まだ文革が終わって間もない頃だから、大学もまともな授業ができるまでに復帰しているところは少なく、留学生の受け入れ態勢も十分整っていなかった。山東大学も例外ではなかった。私は高級進修生という資格だった。当時はまだ大学院が整備されておらず、博士課程も存在してはいなかった。院生という留学生資格は無く、普通進修生と高級進修生の二種類だけだった。高級進修生というのは学部の専門課程を学ぶということであった。今でこそ中国にいる日本人は全く珍しくないが、その時の山東大学には留学生が全くおらず、この年やってきた留学生の中で私が一番早く到着したものだから、学科の偉いさんが集まって歓迎会のようなものを開いてくれた。今では考えられないようなことである。留学生楼も突貫工事で建てた二階建て留学生部屋僅か六部屋程の小さな建物だった。その後すぐに女性用のもう一棟が建った。当初、私は音韻学と方言学の両方を一年で半期ずつ履修するつもりでいた。受講を許可された授業のうち、音韻学は殷煥先先生のもので、訛がきつくて（江蘇省六合の人）、中国人学生も聞き取り難いと言っていたのを記憶している。私はそもそも内容についての知識も不十分だから、当然さっぱりわからない。とはいえ半期分、余り真面目とは言えないものの出席はした。帰国の際には記念にと署名の上で『韻学驪珠』の石印本を下さったから、嫌われてはいなかったと思う。もうひとつの方言学は、銭曾怡先生で、私より 20 歳年上の女性教官である。さすが中国、さすが山東大学と思うのだが、方言学の実習の授業では受講生の中から山東の田舎の地域出身で比較的純粋な方言を話す者を選んで、インフォーマントとして、授業で音声聞き取りを行った。その彼は山東省西南部の単県出身で、児化で tr, thr, tsr, tshr, sr-（音声表記は厳密ではない）のような発音となるのが二重子音のようで面白く感じた。銭先生は特別メニューで方言学の個別授業を行ってくれ、助手を交えて特別に山東方言の調査旅行を企画し、現地で実習指導をしてくれた。具体的地名を挙げれば、煙台、青島、膠南、掖県（現、萊州）などで、所謂「膠東方言」と呼ばれる方言を調査した。これで方言調査のノウハウを教わったことが、後の調査に大変役立っている。まだそれほど方言データが無かった頃だから、声調が三種類しかない方言などに会おうとこれは珍しい！と感激したものである。生の方言（とりわけ変わった発音）を直に耳にすることに喜びを感じ、銭先生も真摯、熱心に指導してくれた。方言学に大いに興味を感じたものだから、殷煥先先生には大変申し訳なかったが、方言学を専門に更に勉強するつもりで留学期間の延長を申請することにし、念願叶って済南におけるもう一年の滞在が可能になった。翌年度には済南の東、淄博の南に位置する博山の方言を調査した。済南からそれほど遠くない所に位置しているが、博山の方言は児化の無い方言として知られ、周囲からも変わった方言だ

と思われていた。この博山方言の児化についてあれこれ考えた事が、方言研究者としての出発点となったと言えるかもしれない。このテーマは私の身の丈にあったテーマで、この現象に遭遇したことは本当に幸運だった。適度に難しくて且つ解決可能なテーマを見つけるというのはそう容易なことではないのである。

なお政府間相互派遣留学についても、私が行けたというのは中国語を専攻する院生がまだ少なく、中国も受け入れ態勢が整っていなかったからである。今では留学希望者も遥かに多くなっているだろうから、今私が応募すれば、書類審査で通ったとしても、面接でそんな中国語のレベルでよく留学しようなどと思うなあと嫌味の一つも言われて、即不合格の烙印を押されてしまいそうである。

1982年に帰国すると、たまたま助手のポストに空きが出来たというので、他に適任者が沢山いたはずなのに、慶谷先生は私を推して下さった。有難いことである。それで三年中文の助手を勤めたところで、今度は神戸外大で長田先生の後任を探しているということで、応募し採用してもらうことになった。まだそれほど業績が無かったにも拘わらずである。そして32年神戸外大で教鞭をとることになった。後の事は取り立てて記すことも無いだろうから、このあたりでとりとめのない無駄話はやめとしよう。

こうして振り返ってみると実に幸運に恵まれた来し方であったとしみじみ思う。数多くの不合格の宣告はさておき、失格の烙印を捺されてもおかしくは無い場面が何度もあった。ところが幸いに(?)鈍感にしてその時点ではその危機的状況に全く気付くことなく、従って精神的にストレスを抱えるというような悩みもなかったのである。自分は何と長く薄氷の上を歩き続けてきたことか。氷が割れて冷たい水の中に落ちるといふことにならずに今に至っているのは、只々運が人並はずれて良かったため、そして師友に大変恵まれてきたからだろう。良き師友に恵まれたというのもまた運が良かったということであろうか。研究は自分にとっては趣味、娯楽なので、ボケない限り死ぬまで続けるつもりであるが、教育者としてはここら辺りが潮時と言ったところだろう。

神戸外大の同僚、事務の方々に感謝して擱筆する。長い間有難うございました！